

# The Gallery voice

NO-48

編集・発行／画廊沖縄 〒901-1114 沖縄県南風原町神里 373 TEL / FAX(098) 888-6117 / 2012.5.11  
Gallery Okinawa / 373 Kamizato Haeburucho Okinawa JAPAN www.galleryokinawa.com

## ウムイヌ花

豊里 友行

うちなー民謡かい「ウムイヌ花」んでいしい節ぐわあーあーしえー。わんねーちぶるんくわいちゃーみぐいー。私は言葉にならないウムイ（想い）をずっと手探りで探している。

ダッチワイフかなにかモノみたいに三人の米兵は、少女を、ガムテープで口を塞いで捨て去った。

怒り？焦り？憤り？

言葉への絶望。そこから私は本格的に写真を学ぶスタート地点になる。感情の舵取りがきかずに荒波の海に私は放り出される。宮沢賢治の『よだかの星』のように星を目指して飛翔し続け、共鳴し合う星たちの輝き。絶望と言う暗礁から私は共鳴し合う星たちの照らす方向に希望を指し示す。だが私の感情は脆い。それは諸刃の剣のようだから私は、常にテーマやモチーフとの距離をしっかりと保つようになる。感情が狂ったコンパスのように方向を見失う。星や月の明かりさえ見失う。私は絶望と言う沈黙の闇にうなだれる。たった一回切りの人生だから私たちの生きるベクトルは、誕生も死もシャボン玉のように輝いて弾ける星になりたい。少女は私みたいな犠牲者がでないようにと訴えた。言葉にならない私の一滴の涙はカタルシス。

怒り！焦り！憤り！

民衆の渦は荒波のように猛る。私は新聞の記号のミジンコをかきわけて走り出した。民衆の叫びは猛る海のような。だが、その猛る海は、集会を終えると水滴のように大地に吸い込まれていく。まるで猛る民衆蜂起でさえ私が流した涙の一滴のカタルシスのようだ。少女を生け贄にしてもなお立ち止まることのない日本や沖縄の社会に私は、絶句する。

日本政府を相手に代理署名拒否し続けた当時の沖縄県知事が、50億円のお金で妥協したのに失望し、ヒーローを奉ることで胡座をかいていた私自身を自戒する。沖縄の現実への妥協の歴史は沖縄の現状をいびつに歪ませ難しくする。これまで譲れない大切なウムイを大切に温めてきた。

私は基地のない沖縄を子孫に残したい。そう夢見るようになってどれくらい時が経つだろうか。朝が来るたびに何度も私はその夢から醒めては愕然とする。もう慣れたはずなのに私は、『よだかの星』みたいに火照るウムイの鈍い痛みを孕む。十代、二十代のみなぎる私の感情は木っ端微塵に砕けた硝子のようにじりじりと、俎（マナイタ）の包

丁痕みたいにじりじりと、私の心を磨り減らしていった。高校生の頃に漠然とだが沖縄のためになる仕事をしたいと私は志し、上京する。私は東京から帰郷するとき桜の咲くのを待ちきれなくて沖縄へ写真家になって帰って来る。私の夢も咲いては散りゆく桜のように愛おしさや切なさを何度も味わった。

怒り。焦り。憤り。

私はあと何回桜を愛でることが出来るだろう。私のウムイヌ花はあと何回咲いては散るのだろうか。言葉への絶望から立ちすくんだあの頃の私はもういない。沖縄も一歩一歩強くなっていくしかないのだ。現実立ちすくむ私の心は叫ぶ！泣き寝入りばかりのこの島なのに私は坦々と沖縄を視る。

希望だけは無くさない。



「ウンガミのハーリー」

2010年（大宜味村）

命を傷つけ、ウムイを傷つけても日常の忙しさに心を無くしたように沖縄のいびつな現実から目を反らしているこの島よ。追いかけて追いかけても掴めない夢は陽炎か。天に飛翔し息切れしながら、やがてこの身も心も焼かれて骨になろうとも私は、星屑とも珊瑚の欠片とも見分けのつかない生きた証を歴史に焼き付けるため写真を撮り続ける覚悟をする。

絶えることのない自然の摂理を尊び、豊かな精神世界を築いた古（いにしえ）のウムイは、何を言っているか解らないウチナーグチのようになったとしても、私は、耳を傾けて、目を凝らして、沖縄のウムイを感じていたい。生まれ育ったこの島に私は、「ウムイヌ花」を咲かせては枯れて果実をつけては種を大地に還す。地球抱擁。

（とよぎと ともゆき／写真家・俳人）

## 「豊里友行君の写真展にむけて」

金城 実

「依存— Independent」。つまり「復帰」とは何かというテーマである。「依存」と「自立」とは何か。豊里君の写真を通じて観客は彼の写真が捉えた沖縄をどう共感し、反発するか。画廊の舞台で展開されるドラマを見てほしい。若者にとって「依存」と「自立」とは何か。その足がかりが著者に問われている。えらいこと引き受けたと思った。とはいえ彼とは十数年の関わりである。彫刻家の著者を何故に被写体にしたか豊里君に訊くがよい。

さて「依存」とは何か。「差別」と「依存」に抵抗してきた闘う彫刻家金城実の写真集。そこには微塵も「依存」という被写体は、ない。沖縄における表現者には、カメラマン、詩人、小説家、画家、彫刻家、琉球舞踊、空手、ロックバンドなどがある。豊里君の写真展に向けて言葉を探すことにした。

『沖縄 1999-2010』写真集の78頁から79頁の写真を見ると「依存」と「抵抗」が見える。前述の写真で見たのが光と影である。まさに筋肉のかたまりの米兵に対して身をさらす「パンスケ」と言われた女性の姿は抵抗である。それは内なる沖縄にも向けられている。敗戦後はおおかたのウチナンチュが彼女らに依存して生き延びてきた。彼女らは、兄弟姉妹を大学まで行かすのに恥と過酷な労働を強いられた。それが彼女らにとっては誇りとなった。著者のおばさんもそうだ。

そもそも『フランス革命のおりバスチーユ監獄をおそったフランス民衆の前衛は、実にパリの娼婦たちだった。(省略) 復帰協よ、汝らの祖国のストライキのさきがけは、実に娼婦たちだった。その歴史を知らずして、何が祖国復帰ぞ……』。この文章は沖縄県民よりも人権無視と疎外された奄美大島出身で沖縄中部日報社長タクマ氏である。公務員・お偉い先生方、労働組合や当時の屋良主席が上程した売春禁止法に対する痛烈な批判である。

豊里君の写真は、『彫刻家金城実の世界』写真集の35頁にある「コザ蜂起に走る娼婦」に重なる。「依存」とは、まさに「影」を視た者の「自立」への語りである。そこに豊里君の沖縄への視線が見える。

著者が書いた小説が二つある。『神々の笑い』、『ミッチアマヤーおじさん』。それら米軍支配下で身を売った貧しい離島や農民漁民たちの女性で、「ムトゥシンカカラヌー」(資本金がいない身売りの女性)と言われた

娘たちだった。著者のおばさんもその一人だった。高校時代教師をしていた島の先生から著者とおばさんを前にして「まだ、ポス・ポスしているのか」と馬鹿にされたが抵抗できなかった自分を長いあいだ責めてきた。いずれオトシマエをつけなければと思った。先に述べた二つの小説には、その想いを込めて屈辱とそれへの抵抗を表現した。1970年12月20日コザ蜂起も復帰も大阪で迎えた。学生の頃休学して嘉手納米軍基地でおばさんの連れ合いの米兵の紹介でアルバイトを体験していた。著者は、おばさんの生き様とコザ蜂起から彫刻家になることを決意した。それが著者の抵抗への原点である。

1995年の少女暴行事件は依存と自立を問う事件だった。それを引きずってきた著者にとって豊里君の写真は、まさにこれを外していない。貧しさから米兵に身をまかせてコザに流されてきた彼女らが、「依存」という言葉に封じ込めるとするならば、まさに人間への冒涇と勲(いたわ)ることになる。部落解放運動の中に「水平社宣言」がある。「人間を冒涇してはならない。人間を勲る事が何のであるかよく知っている。吾々には、心から人生の熱と光を願求礼賛するものである。」(西光万吉草案) この宣言が沖縄につながっていることに気付くであろうか。



「職業婦人」

2006年(沖縄市)

豊里君はここ10年間に渡って近年、沖縄靖国裁判にも同行してきた。靖国は天皇制と国家権力との闘いであった。つまり「依存」と「自立」は、この国に抵抗することによって見えてきた光であった。そのベースに「影」があったことを見失ってはならない。豊里君は文学的才能もそなえたカメラマンである。時折、「依存」は絶望の顔を見せるが抵抗の遺伝子を産み進化する。「依存」、「自立」、「自決権」、さらに独立への通過点に豊里友行君のような若者がいることを誇りに思う。

泣くなよ。ウチナー。

(きんじょう みのる/彫刻家/2012年4月4日)

## 「立ちはだかる糖衣と粘膜」

松本太郎

写真雑誌 LP の編集人として一年余り豊里友行の写真と付き合い、今年三月の LP 第 18 号で豊里の「カーニバル」を特集した。彼が写真行為にかけている想いに耳を傾け、曖昧な点は何度も繰り返してしつこく問いただした。その経験を踏まえ、豊里に贈る気持ちを込めて述べてみたい。

「沖縄」をテーマにすえて写真を続けていると豊里自身はたびたび表明している。沖縄で生まれ育った青年が沖縄を撮る。内側の人間が内側を撮るということだ。沖縄を撮る豊里の写真は、外の者がともすれば無意識にやる利己主義・利用主義的な写真行為とは対極にあつて、自分たちの生存の問題を考えるための方法だと私はとらえている。方法についてそれほど今は意識的でないとしても、彼は〈写真で沖縄を撮る〉写真家であり、無自覚に〈沖縄で写真を撮る〉写真家とは対照的である。写真家の見る倫理と撮る責任は、見られるものと撮られるものの側に立っているかどうかで決まってくる。なぜ見るのか、何を撮るのかという自問の形で、写真家の態度を決定づけている。

豊里の写真は肯定的である。沖縄に暮らす同志に対しても、米兵や日本人に対しても好意的な雰囲気の写真である。彼に聞けば「出会い」を大切にしていると言うのだが、トモダチをつくるために写真をしているわけでもあるまい。例えば米軍基地と民衆の関係は両者が友好的に出会ったわけではなく、収奪され陵辱され暴力的につくられた関係であり、今も続いている現実だ。だが豊里の写真は関係性を鋭く抉らず、ヒューマンイズムの糖衣で包んで肯定形にしてしまうところがある。ひりひりした感覚より、記念写真風の甘いものが目につく。こういう写真が沖縄の闘いにどういう意味を持つのか断ずることはできないが、現在のところ豊里自身が何と闘っているのか写真では明確に語られていないと思う。

日本本土と米軍基地が押し付ける厳しい現実に対峙し続ける沖縄にとって、人びとの記憶のための写真は抵抗の武器になってきた。自分たち沖縄の記憶のために撮っているかどうかは豊里の写真にとって重要なことである。しかし今の豊里が考える「自分たち」には、沖縄人も日本人も米兵もいっしょくたなところがあるようだ。本質的な相違よりも表層的な類似性に彼が目奪われるのは、なぜ米兵や日本人が沖縄に存在するのかを問う歴史的感觉よりも、日米の価値観が大量に流れ込んだ現実を生きる中で、日常の矛盾をやり過ごすために身につけ

た習性のせいかもしれない。だが彼は写真家である。自分は何者なのか、自分たちとは誰のことなのか、歴史的事実を踏まえて具体的な位置に立たなければ、高見の見物をする外からの視点に同化してしまうだけだろう。写真家の立つ位置を不問にした高踏的な写真や、現実の生にしっかり根をはらない迎合的な写真は、撮られるものたちの魂を奪いかねないと思う。被写体の声に静かに耳を傾け、「自分たち」の姿を丁寧に描くような自画像としての写真を、今後の豊里に期待している。



「ピザを食べる家族」 2011年（浦添市キャンプ・キンザー）

では、基地がもたらす問題が見えない粘膜としてべっとり貼り付いた現実の中で、自画像を撮ることはいかにして可能なのか。まずは「距離」ではないだろうか。現実を覆っている粘膜を異物として可視化する距離を得てはじめて、自分たちの姿を露光できるのではないか。今の豊里は沖縄のさまざまな現場に足を運び、独立した写真家として誰よりも精力的に取材を続けているが、押し付けられた粘膜すら自分たちの身体の一部として愛撫してしまっているように見受けられる。同一化はある種の隠蔽となり、覆っていた粘膜を異物と感じさせなくなる。距離を欠いた写真は単なる現状追認と自己憐憫の玩具として消費されるだけだ。

異なるものを異なるものとして突き放し、皮膜の下の自らの身体として沖縄の姿を撮影したとき、豊里の写真は肯定でも否定でもなく、疑問形の自画像となって表されるのではないだろうか。豊里の最初の写真集『東京バクトル』（2008年）の冒頭にあった豊里自身の姿をとらえた写真に、彼の方法の原型があると私には思える。

（まつもとたろう／雑誌LP編集者／美術館学芸員）

# TOMOYUKI TOYOZATO



## 豊里友行について

豊里友行氏は1976年沖縄市泡瀬（アーシ）生まれ今年36歳。ここ数年の発表活動（写真展）は活発で、復帰後生まれの若手の写真家として目立った存在である。1999年日本写真芸術専門学校を卒業。同年帰郷し積極的に取材活動をスタートさせている。社会派の写真家と知られる樋口健二氏に師事もあつたか、今日の状況と向きあい、沖縄の基地問題、戦争の記憶など社会性の濃いテーマにカメラを向けた作品が多い。

豊里の出発点は東京の日本写真芸術専門学校時代（豊里氏20才）に激写した作品集「東京バクトル」（沖縄書房発刊／2008年）であろう。沖縄を飛び出し大都会の東京で新聞配達をしながら写真を学び、若者の真っ直ぐな目線で、都市で暮らす一般市民の生活者風景を捉えている。バブル経済が崩壊し、10年が経った世紀末の都市「東京」の日常が写し撮られている。経済の右肩上がり時代を過ぎた者には想像し難い風景である。冷え切った社会、日本の中央「東京」で暮らす一般の人々の匂いがプンプン伝わってくる。近代的な高層ビルのおもて、公園に暮らすホームレス（野宿者たちの唄）。彼らは表情は意外にもあつちらかんと明るく力強い。その一方で、エスカレーター上の、疲れ果て肩を落としたサラリーマンの後ろ姿。路上で懸命に働く靴磨き職人のオバサン。仕事帰りに赤提灯で疲れを癒す人々。どこか40年前の下町や駅前、ガード下の昭和の風景と重なる。哀愁が漂う風景、日本の庶民は変わらないなと・・・勝手に想像してしまう。

豊里の写真は、ドアップの至近距離の画面や、動画の一コマを停止させたような荒い画面、かと思ふと詩的で静かな絵画的な画面ありで実に多彩だ。ズーミングが効いてエネルギー、自在にファインダーに向う眼差しと、リアリティーある画面は魅力的である。また、一般的に流通す

る絵画性を踏まえた構成や緊張感は薄いと感じられる。がしかし、対象へ向かう真面目な突っ込みと、ユーモアを忘れないぶっ飛び手法は豊里独自の個性であろう。コザ高校時代より俳句を本格的に学び、若き俳人としても知られている。その文学的な才能と感性は写真表現の面でも独特な個性として現れているように思われる。将来が期待される写真家である。

豊里は「言葉の限界を感じ、表現をカメラに希望を託した」、「言葉で出来なかった部分を写真を介して現実を直視したい・・・」彼は素直に言い切る。その思いが一冊の活動10年間の写真集として刊行された。若き写真家の志を示した記念碑的な作品集「沖縄1999-2010戦世・普天間・辺野古」（沖縄書房発刊／2010年）である。その写真作品集に収録された「子供たちも兵器に触れる」（2006年 普天間飛行場）には一瞬目を疑った。これは一体何か？ ゲームではないのだ。まるでパソコンのゲームやゲームセンターのバーチャル風景のようである。小学4年生くらいの沖縄の少年が米軍の機関銃を両手に目の前の人々に照準を当てている写真である。更に、戦車の上に数名の幼い少年たちが登り、米兵に誘われるように銃砲に手を触れ、得意げな少年の顔が捉えられている。何かのお祭り気分が入っていった軍事基地の風景の一コマであるが、米軍基地の中で起こっている非日常世界の日常化”は、自然体で「思考停止」した沖縄人の姿が捉えられている。

「基地との共存」「基地との共生」「経済復興」を旗じるしに掲げた「沖縄イニシアティブ」の著書は記憶に遠くない。3人の著者が県政のシャドウブレンとなり、推し進めて来た「基地跡地利用」の結末の姿がここにある。日本化が加速し観光立県を目指す県政。基地に依存、共存し思考停止する沖縄社会。無意識な親の振る舞いは未来を担う幼い子供たちの心を蝕み、少年の身体に「依存症のウイルス」が住み着く瞬間の風景写真だ。さらに、経済復興の下に展開した北谷のアメリカンビレッジは象徴的な「思考停止空間の街」であろう。ビレッジで沖縄若者たちが、米兵やその家族と共存している風景は異様に映るのは私だけだろうか。豊里は大人の遊園地のように消費と享楽にふける街（ビレッジ）の若者たちを撮り下ろしている。

しかし、豊里は声高な表現は好まない。「雑誌LP18号」の特集「カーニバル」では、状況に対してかなり明確な発言と問題意識を示している。しかしながら、沖縄の現状を写真を介して見続けるとし、両義性を孕んだ写真を提示している。二項対立の構図をさけ、あえて観る者をグレイゾーンに誘い込み、根源的な問題への問いかけや、「気付き」を促し、「問題の本質」は他者にゆだねる手法をとっている。

さて、今回の復帰40年企画展、問題、課題が山積している沖縄社会。未来社会のあるべき姿を懸命に探し求め、「路が見えない」ともがく若き写真家の姿がある。復帰後世代の豊里は何を見たのか、何を伝えたいのか。未来に希望が持てるのか、沖縄社会の表象を捉えた作品群から無言のつぶやきを聞いて欲しい。（画廊主／上原誠勇）

## 豊里友行(とよざと ともゆき／写真家・俳人)

### <略歴>

- 1976年 沖縄市生まれ
- 1999年 日本写真芸術専門学校卒業(樋口健二ゼミ)。帰郷し沖縄の問題をテーマに取材活動スタート現在にいたる。
- 1999年 MSF(国境なき医師団)フォトジャーナリスト賞最終審査ノミネート。「天荒俳句賞」 第一回、第六回、第七回受賞。
- 2003年 『バーコードの森』豊里友行句集発行。第三十七回沖縄タイムス芸術選賞奨励賞(文学部門・俳句)受賞。
- 2005年 「辺野古」豊里友行写真展を沖縄県内で巡回展をする。県外での写真展も同時に協力者によって行う(石川県や大阪府その他の県多数開催)。「沖縄の辺野古とイラクの戦場」3人展(今泉真也・豊里友行・親泊健／元麻布ギャラリー)「美ら海からのメッセージ基地・平和・環境沖縄の辺野古とイラクの戦場」3人(今泉真也・豊里友行・親泊健)展(福岡、その他巡回展多数)
- 2008年 「海鳴りの島・沖縄」写真展(辺野古のテント村、中部写真館など)。『東京ベクトル』豊里友行写真集(沖縄書房)発刊。
- 2009年 アンソロジー句集『新撰21』(共著)発刊。
- 2010年 VS俳句王国に出演。『彫刻家金城実の世界』豊里友行写真録発刊。「戦世(いくさゆ)から沖縄世(うちなーゆ)ま金城実の世界」豊里友行写真展(南風原文化センター)『沖縄1999-2010戦世・普天間・辺野古』豊里友行写真集発刊。『沖縄1999-2010』豊里友行写真展(那覇市久茂地公民館)。『沖縄1999-2010戦世・普天間・辺野古』豊里友行写真集改定増補版増刷。
- 2011年 『沖縄桜』豊里友行写真展(ヒラカワ洋菓子店ギャラリー)。写真雑誌『LP』季刊で「高江」、「読谷」、「コザ」、「辺野古」の「沖縄2011」シリーズを連載。NHK俳句王国に2週出演。
- 2012年 「沖縄桜」豊里友行写真展(西原町立図書館)。雑誌「LP」18号豊里友行の写真シリーズ「カーニバル」を60頁掲載(特集)。  
復帰40年企画「依存-Independent」にて、「白い地図」をテーマに個展(画廊沖縄)

●出版社沖縄書房代表／沖縄市文化協会写真部部长／「月と太陽(ティダ)」俳句会代表

●ブログ「とよチャンネル」= <http://toyoanneru123.ti-da.net/>